

Alamy



黑羽根天使III

~妖精醒来~

泡蔵  
AWAZO

## 第一章 集まる集まる亜人種達

- |   |          |     |
|---|----------|-----|
| 1 | 虜の薫      | 3   |
| 2 | それは突然現れた | 62  |
| 3 | ミュウの災難   | 109 |
| 4 | 妖精欲情ス    | 159 |

## 第二章 色々のんびりしてられない

- |   |         |     |
|---|---------|-----|
| 5 | 父からの手紙  | 222 |
| 6 | 薫……男へ   | 274 |
| 7 | 男の快樂再確認 | 307 |
| 8 | 解き放たれた薫 | 394 |

## 第三章 人間・薫の天下？

- |    |              |     |
|----|--------------|-----|
| 9  | 魔鬼の早計。美姫の思惑。 | 447 |
| 10 | ミュウの目論見      | 514 |
| 11 | 欲望は限りなく      | 553 |
| 12 | 薫再び……        | 598 |

あとがき 654

イラスト：KUN

# 第一章 集まる集まる亜人種達

## 1 虜の薫

薄暗い部屋の中、少女の荒くなつた息遣いが聞こえていた。

その声はコンクリートで作られた壁に反響し、より艶めかしく部屋の中を響き渡つてい

る。

「ハアハアハアハアハア……」

声の主は大方の予想通り青葉薫であつた。

薫は両手を手錠で拘束され天井に固定された鎖で吊されていた。またその長さが絶妙で、座り込めない微妙な高さになっているところが拘束者の意図を感じる。しかもその姿はシチュエーションにピッタリと言わんばかりに

あられもなく、スカートは脱がされているわ、ブラウスのボタンは全て外されているわ、ブラジャーは着けられていないわのなんとも目の保養になる身なりをしていた。この期に及んでチラチラと見え隠れする小さな胸が気になるのか、必死に隠そうと身をよじる姿が、抱きしめたくなる程可愛らしい。

「アウツ……もうダメ……もうダメなの

……」

上気した顔を上げ、誰もいない部屋の中を見回す。

艶めかしい姿とは裏腹に、この危機的な状況――

まさか誘拐されてしまったのだろうか？  
躰が感じやすくなりすぎているため、かなり危うい生活を送っている。たちの悪い男に

目を点けられても不思議ではない。もしや、毎日のようにつきまとっていた痴漢男が、暴挙に出たのだらうか。

しかし、薫を誘拐するにはクリアしなければならぬ生涯が沢山出てくる。

摩訶不思議な人生を送っている薫の周りには、人間以上のパワーを持った人物（？）が何人も控えている。それだけでも易々と薫を

誘拐できる人間がいるとは思えない。それに薫の表情からは、欲情の色が浮かんでいるものの焦っている様子は伺い取ることにはできなかった。

ならば、これはどうということなのだろう。やはりエル達の仕業なのだろうか？ たちの悪い考えを持っている連中だ。このくらい  
の意地悪は笑顔でこなす。

なんとなく予想ができてきたが、現在薫は  
艶めかしい姿で吊されているのだけは事実。

そして、薫が欲情していることも。

「お願い……外して……こんなコトされたまま  
まじやおかしくなっちゃう」

男の股間を直撃しそうな台詞を言っている  
が、感じすぎる薫の躰を考えるならよく我慢  
していると言っているいいかもしれない。

スラリと伸びる綺麗な脚には、いったいどれくらいかの量が流れるのか不思議になる程の愛液が流れ落ち、足下には水溜まりが出来上がっている。

薄いピンク地のシマシマパンティーは、毛細管現象によって大半が濡れ、浸食を更に広げていく。

その原因を作っているのは股間で小さな

モーター音を響かせながら小刻みに振動しているローターで、その振動はもう何時間と続いていた。しかも、ローターは最弱に設定されているのだからたまらない。こんな微弱な振動ではイきたくともイけないのだ。そして意地悪はまだまだ続く、コントローラーはこれ見よがしに胸ポケットに入れられているが、拘束されている薫にはどうすることもできず、

まさに蛇の生殺し状態であつた。

「もうダメなの……ボク壊れちゃうよ……お姉様……美姫お姉様。お願いです。ボクもう我慢できません！」

悲痛な叫びが部屋の中に木霊する。

薫は美姫に監禁されていたのであつた。

まあ、予想通りと言えば予想通り。これはあくまでプレイの一環なのである。

今日は日曜、美姫に「プラーナ」を吸って  
貰う日——

薫は美姫のマンションを訪れた途端こんな  
仕打ちをうけていた。それにしても、マンシヨ  
ンにこんなプレイルームまであるとは……確  
かに美姫の部屋は高級マンションの最上階。

お金に不自由はないと言っても、なんと  
言ってもこの部屋を作って貰ったのだら  
う。やはり魔神の力を用いたのだら  
うか？

それはいいとして「ヘプラーナ」を吸  
って貰うため美姫のマンションに  
来たというのに、何故こんなこと  
になってしまったのだらうか？

なににもできない状況でローター  
を入れっぱ

なしにされているなど、今の薫にとつては拷問でしかない。全く美姫はなにを考えているのだろう。まあ、ろくなことを考えていないのは、この状況を見れば良くわかる。

「お姉様……ゴメンナサイ……もう許してください。ボクもうダメッ！ 立っていられますん……」

そうは言っても絶妙な位置で固定されてい

るのでしゃがみ込むこともできない。しかも、手首を固定しているのが手錠なので体重をかけることもできず、薫は生まれたての子鹿のように足を振るわせながら立っているしかなく、かかった。

「アツアツ……もうダメツ……もうダメです……美姫お姉様……助けて……」

助けてと言うのは正解ではない。この状況

は美姫が作り出しているのだから助けてくれるわけがない。とは言うものの美姫はこの状況を何処かで見ているはずである。薫にも視線は感じるので、必死で呼びかけているのだ。その悲痛な叫びに応えたのか、正面にある重々しい鉄の扉がゆっくり開かれると、美しい微笑を浮かべた美姫が姿を現した。

「お姉様……お願い。ボクどうにかなっちゃ

いそうです……今日はボクの「プラーナ」を吸ってくれる日じゃないですか……だからお願いです。早く「プラーナ」を……」

「そうなの「プラーナ」だけ吸ってあげればいいのね。それじゃあ「プラーナ」だけを吸うことにしましょうか？」

意地悪な笑みを浮かべながら近づいてくるとソツと頬を撫でる。

その言葉に薫は寂しそうな表情をする。瞳には涙まで浮かんでいる始末だ。

「違うの……お姉様の意地悪……ボクに触つて……いっぱい気持ちよくして欲しい。ボクをいっぱいイカせて……お願いします」

薫は震える足で必死に躰を支えていた。こうしている時も、微弱なバイブレーションが断続的に躰を刺激しているのだからたまった

ものじゃない。

「そうねえ。薫がそこまで言うのであれば、  
いっぱい気持ちよくしてあげてもいいわよ」

「本当ですかお姉様。お願いします。ボクを  
……ボクを無茶苦茶にして下さい」

表情がパツと明るくなる。美姫に抱かれる  
ことを想像するだけで軽くイッてしまってい  
るのではないかと思う程だ。しかし、これが

本当に元男の表情だとは信じられない。すでに男であつた時の感覚など忘れてしまつているのかも知れないが、この表情は女の喜びを心の底から味わおうとする牝の顔であつた。

「わかつたわ。それじゃあ、もう少し経つてからしてあげましょう」

「そんな……なんで今じゃないんですか。ボク、もうダメなんです……だから……」

「ダメよ。ちゃんと時間は守らなくっちゃ。

待ち合わせの時間を守らず勝手に早く来たんですからね。いけないのは薫なのよ。わかる」

敏感になっているのをわかっていて耳元でそう囁くと、もう一度意地悪な笑みを浮かべた。その笑顔は心底楽しんでる顔である。

薫は、約束の時間より3時間も早く訪れたのだった。

当然、美姫もそんなことは予想していたらしく、薫が恥ずかしそうに頬を染めながら立っただけでも驚きもしなかった。

ようは薫が快樂に負け約束の時間まで我慢できず押しかけてきたのだ。

直ぐに抱いてくれるものだと思っていたのだが、美姫がそんな薫の思惑通り行動をするわけもなく、軽く愛撫をしてからコンクリー

ト張りの部屋に閉じこめると、別の部屋から紅茶を飲みながらゆっくり観察していたと言うわけだ。全く、ドSっぷり全開である。

「それは……それはわかってますけど……ボク我慢できなかつたの……じゃあ、せめて手錠を外して下さい。このままじゃ本当におかしくなっちゃう……」

オナニーでもして慰めておかないと本当に

狂ってしまおう。しかし、そんなことを言っても美姫が「はいそうですか」と外してくれるわけがない。

「それはダメよ。すぐ時間になるからもう少し待ちなさい。エルちゃんと魔鬼は来てるけど雪柊ゆらぎと晴希がまだ来ていないのよ。そうだ。薫も一緒にリビングで待っていきましょう」

またなにか思いついたらしく嬉しそうな笑

みを浮かべると手を軽く横に振って鎖を断ち切った。そして、直ぐに鎖の先端を掴むと手が下がらないようにする。ほんの僅かな時間ですら自分で愛撫させないつもりらしい。

「いや……もう許して……お姉様、ゴメンナサイ……ボク、ボク……」

涙を流し躰を美姫にすり寄せる。なんとかして美姫をその気にさせようとするが、百戦

鍊磨の美姫が、そんなことで動じる訳がない。

「ダメよ。さあ、ちゃんと歩きなさい」

躰を突き放し鎖を引くようにして無理矢理リビングへ連れて行く。薫は震える躰に力を入れ、必死になって美姫の後に着いていくが今にも倒れそうだ。

そしてリビングでは、これまた悲惨な光景が広がっていた。

「姉さん！　これが弟に対する仕打ちか！

ここから出してくれ！」

「美姫姉様。お帰りなさいませ」

魔鬼は部屋の端にいつの間にか現れた檻の中に閉じこめられていた。まあ、魔鬼のことだ。エルに手を出そうとしたか、黙って薫を襲いに行こうとして閉じこめられたのだらう。

喚き続ける魔鬼のことなど綺麗サツパリ無

視をする美姫、そこに魔鬼など存在すらして  
いないと言いたげだ。

「エルちゃん。ちよつとこの鎖持っててくれ  
るかしら、薫が自分でしないように見張って  
いるのよ」

「はい美姫姉様」

そう言つて薫を受け渡すと美姫は玄関に向  
かった。その数秒後チャイムが鳴る。気配で

雪柵達が来たことを悟っていたらしい。

「薫、凄く濡れていますわよ。それにもう我慢できないって顔していますわ」

「エル……エル。ボクどうにかなっちやいそうなの……お願い。なんとかして」

ソファアに投げ出されると今度はエルを求めた。そんな顔を見ていると誰でもいいようにも見えるが、薫は薫なりに求める相手を選

んでいるつもりだった。

前回の騒動で今まで以上感じやすくなっているのでもうどうなるかわからないが、思いを寄せているエルを求めるのは自然なことだろう。これで、魔鬼にまで求めるようなら、おかしくなつたと疑うべきだ。

「そんな顔をしてダメですわ。今日は美姫姉様に無駄な〈プラーナ〉を吸い取って貰う

ために来たのでしよう。わたくしが、手を出すわけにはいきませんわ」

こんなに艶めかしい薫を見ても、エルは美姫と同じような態度を取るだけだった。全く神人にしても魔神にしてもドSしかいないのだろうか。

「でも、本当に可愛いですわ。昨日わたくしとしている時とまるで別人ですわよ。さすが

美姫姉様ですわね。薰ったら完全に調教されてしまっていますわ」

腕を固定し、軀を撫でるようにして悪戯をする。

しかし、それ以上のことはしない。下手な悪戯をしてイかしてしまったら美姫になにをされるかわかったものではない。その辺はちやんと心得ているエルであった。

「ハアアアアアア……イヤアア……もつと  
しつかり触つて……アウツ……ダメエエ……  
もつともつとおおお」

そんなことをされて、たまらないのは薫で  
ある。股間の微弱なバイブレーションに加え  
胸への軽い愛撫。まさに快樂地獄であつた。

「あらあら、ダメでしょエル。そんなことを  
したら薫が可愛そうよ」

そうこうしている間に、雪柊達を迎えに行った美姫がリビンググへ戻ってきた。

「あらら、薫ちゃんもうこんなになっちゃってるの。私達が呼ばれたんだから絶対にこうなるとは予想してたけど早くない」

なにも聞かされず呼び出された雪柊と晴希だったが、マンションに到着して直ぐ、こんな光景が飛び込んでこようとは予想していな

かった。

「そうなのよね。本当は3時に来る予定だったんだけど、どうも我慢できなかつたみたいなの。ホントいやらしい子になってしまったわね薫は」

「本当だぞ。女の子がそんないやらしい顔をしていいのは好きな男の前だけだ」

晴希のとんでもない一言が飛ぶ。冷静に話

しているようだが、晴希の股間は大きく盛り上がっていた。まあ、健康な男子なら当然の反応だろう。

「ハアハアハア……そんな……ボクの躰がこんなになつたのはみんなが悪いんじゃない。みんながボクを抱いちゃつたから感じやすくなつちやつたんだよ……それなのに……そんな言い方するなんてヒドイ……」

快樂に潤んだ瞳を晴希に向ける。睨んでい  
るのだろうか、晴希の股間を刺激するだけの  
効果しかなかった。まあ、薫の躰をよりいっ  
そう感じやすくした原因を作った人物が集結  
しているのだ。薫だけ悪くいわれる筋合いは  
ない。

「そうよねえ、全く晴希も少しは反省しなさい。薫もそんな言われ方されたら可愛そうよ

ね。これは少し罰を与えないといけなしかし  
らね」

美姫の唇が歪む――

その笑顔を見ただけでこのメンバーを集めた理由など想像がつく。当然素直に、薫のへプラーナを吸うためではないのは誰の目にも明らかだ。

そんなことは晴希達にも想像が着いたはず

なのに、ノコノコ美姫の元へ着てしまうのは、やはりバンパイアである美姫のフェロモンが原因なのだろうか。

「それじゃあエル、もういいわ。雪柎、薫をベッドルームへ連れて行ってもらえるかしら」

「えっ、私ですか？ はい、わかりました」  
なにもわからず雪柎は肩にかけていたバツ

グをソファアの横に置くとエルから鎖を受け取り、薫の躰を支えた。

「さあ、あなた達も私の後についていらっしやい。魔鬼あなたもよ」

そう言つて、一度指を弾くと魔鬼を拘束していた檻が消えた。

「全く、なんで僕がこんな目に遭わなくちゃならないんだ」

「無駄口叩いてないで早く来る！」

「ははははい」

ブツブツ文句を言っている魔鬼をたしなめ、美姫達は大きなベッドルームへと入っていった。

「雪柙、カギはベッドの横に置いてあるから薫を自由に上げてあげて、でも、まだ手を出しちゃダメよ」

「はい」

薫をベッドに寝かし手錠を外す。すると薫は直ぐにローターを抜き取り雪柁を押し倒した。

「雪柁……雪柁い……ボクもうダメなの。なんとかしてえ」

欲情した薫が雪柁の胸に顔を埋め身をよじる。

そんなことをされて、本来雪柊が黙っているわけもないのだが、美姫の言葉が効いてい  
るらしく、頭を撫でるだけでその先をしよう  
としない。誰もが美姫の言葉には逆らえない  
のであった。

「さあ、あなた達はそこに座りなさい」

「なんでそんなこと——」

「いいから早く座る！」

強い口調に、エル達三人は、慌てて美姫の前に正座した。その姿はまさにしかられてい  
る子供のようである。

「あの……美姫さん。なぜ俺達はこうして  
いるのでしょうか」

この期に及んでも、なぜ正座させられてい  
るのかわからない晴希は、間抜けながらも説  
明を求めた。それはエルも同じだったが、魔

鬼だけはいつもこのような仕打ちを受けているので、既にふさぎ込んでいる。気分次第で魔鬼をイジメるのだから、今更理由を聞いたところで悲惨な運命が待っていることは変わらないと諦めているようだ。

「下半身の反応は早いのに意外と鈍いこと言うのね。三人が薫をこんな躰にしちやっただのは、この間説明したからわかっていているわよね」

「はい、まあ……」

「よろしい。それで、薫だけヒドイ目に遭っているのは、ちよつと不公平かなあゝつて思つたのよ」

「ちよつと待て、今の薫さんの状況をわかつてそんなことを言っているのか！ 散々、我慢させられ、殆ど監禁状態で快樂の拷問を受け続けていたと言うのに、よくもそんなこと

を言えたものだな」

今までふさぎ込んでいた魔鬼が、息を吹き返したかのようにまくし立てる。確かに、薫の躰が感じすぎてしまう状況を作り出した原因の一端は魔鬼も担っている。しかし、それをヒドイと言うならば、今の状況も十分ヒドイのではないだろうか？

「うるさいわよ」

魔鬼の反抗に不機嫌な顔を見せると容赦な  
ど微塵も見せず美姫の手刀が魔鬼の額を貫い  
た。

「びよおおお！　ね、姉さん。抜いて、抜いて」  
黙らせるのはこれが一番とでもいわんばかりの  
行動である。本当に魔鬼にはめっぼう巖  
しい美姫であった。

「ホント口だけは達者なんだから。いいこ

と。薫はあなた達のせいであんな躰になつてしまつたのよ。それを私がへプラーナを吸うことで少しは抑えてあげようと言うの。あなた達は黙って私が見ていなさい！」

そう言い終わると、どこからともなくロップが三人に飛んできて躰を縛り上げた。付け加えておくが、このロップはいくら神人や魔

神と言えども切れるような代物ではない。しかも、縛り方はなんともマニアックな亀甲縛りである。

「み、美姫姉様。見てなさいと申されますと……わたくしたちが、美姫姉様と薫のこれからする行為を見ていると言うことですの」  
今そう説明を受けたにも関わらず、エルは確認するかのようには繰り返した。

いつたいこんなことをしてどうしようと言  
うのだ。まあ、二人のSEXを見て興奮に耐  
えられなくなるのは普通に考えれば晴希くら  
いなものである。エルと魔鬼は腐つても神  
人・魔神である。他人のSEXを見たところ  
で欲望に支配されることなどない。

「そうよ。まあ、私も淫気を発散させますか  
らね。それと薫のも増幅するから、ちゃんと

エルちゃんにもお仕置きになると思うわよ」

「ひっ！　美姫姉様……お顔が笑っていらっ  
しゃいますわ。も、もしかして——」

「楽しんでる」の言葉は続けられなかつた。当然、三人にお仕置きをすることが本来の目的ではない。自分が楽しむためにセツティングしたまでのことだ。

「さあ、私の淫気に何処まで耐えられるかし

らね。天界学校4年生の実力を見せて貰いましょうか」

「美姫姉様、待って頂けませんか。あ、あの、聞いていらっしやいます。美姫姉様あ」

そんなエルの言葉など聞く耳を持たず、美姫はきびすを返すとベッドに歩み寄った。

ベッドの上では薫にすり寄られている雪柊が真っ赤な顔をしている。雪柊は雪柊で、こ

の拷問のような状況に耐えていたらしい。

「よく我慢しましたね雪柊。いい子ですよ」

「いえそんな……でも、私はどうしたらいいんですか？ 私も少しは悪いところがありますけど……直接薫ちゃんの躰をどうこうした訳じゃないんですが……」

散々薫をおもちやにして遊んでいたが、感じやすくなつた原因を作つたわけではない。

「そうね。まあ、雪柙は私のサポートとして呼んだだけだから安心なさい。でも、私がしてあげるのは後、まずはオナニーでもしていなさい。あつ、イキそうになったら言うのですよ。へプラーナを吸ってあげますからね」

「はい」

頬を撫でられた途端虚ろな顔になり、薫から躰を離した。

「さあ、薫。私の方にいらっしやい。待たせ  
たわね。うんと可愛がってあげるわよ」

「ハアアアアア……はい、お姉様……ボクを  
いっぱい可愛がって下さい」

疲れた笑顔を見せ胸に飛び込んでいく。そ  
して、二人はベッドの中へ沈むと同時に、美  
姫の指は薫の秘裂に差し込まれ、もの凄い勢  
いで動き出すのだった。

「アアアアアア……お姉様凄い……イクツ、イクウウウウ」

今まで我慢していた欲望を一気に爆発させるように絶頂を迎える。しかし、その絶頂は美姫のテクニクにより途切れることなく襲いかかってきた。

「アアアアアア……そんな……凄い、凄すぎるううう」

悲鳴に近い喘ぎ声が、エル達の鼓膜を刺激する。

「凄いですわ……薫の顔……凄くいやらしいですわ……」

鼓膜が性感帯と直結してしまったかのように刺激する。

「また……またイクウウウ……止まらないのおおお……」

続けざま、最高の喘ぎ声がベッドルームを包み込む。

「ぐあっ！　　凄い淫気だ……ちよつと姉さん……もう少し抑えて」

「ダメですわ……全身がムズムズします」  
「なんだこれ……」

一気に吹き上がった淫気に、エルと魔鬼も欲情してしまっている。晴希に至っては気が

狂ってしまったのではないかと思える程だ。

「気持ちいい……凄いい、凄いいのお……」

エル達の苦しみなど気にもせず、薫のなんとも言えない幸せそうな喘ぎ声がベッドルームに響き渡った。

それから数時間――

強力な淫気に、ミル達三人はとてつもない欲望を覚え、ため込んだ欲望を発散できない

苦しみに耐え抜くことになるのだった。